

一写一筆

～静岡の今

地震に学ぶ「減災」の備え

熊本地震が列島を震撼しんかんさせている。

今年は、あの東日本大震災から5年が経過した節目の年とあって、3

・11前後から東北被災地の復興の現状など震災関連の報道が多かった。被災地の海岸線では防潮堤の整備や高台造成など大規模な防災・減災対

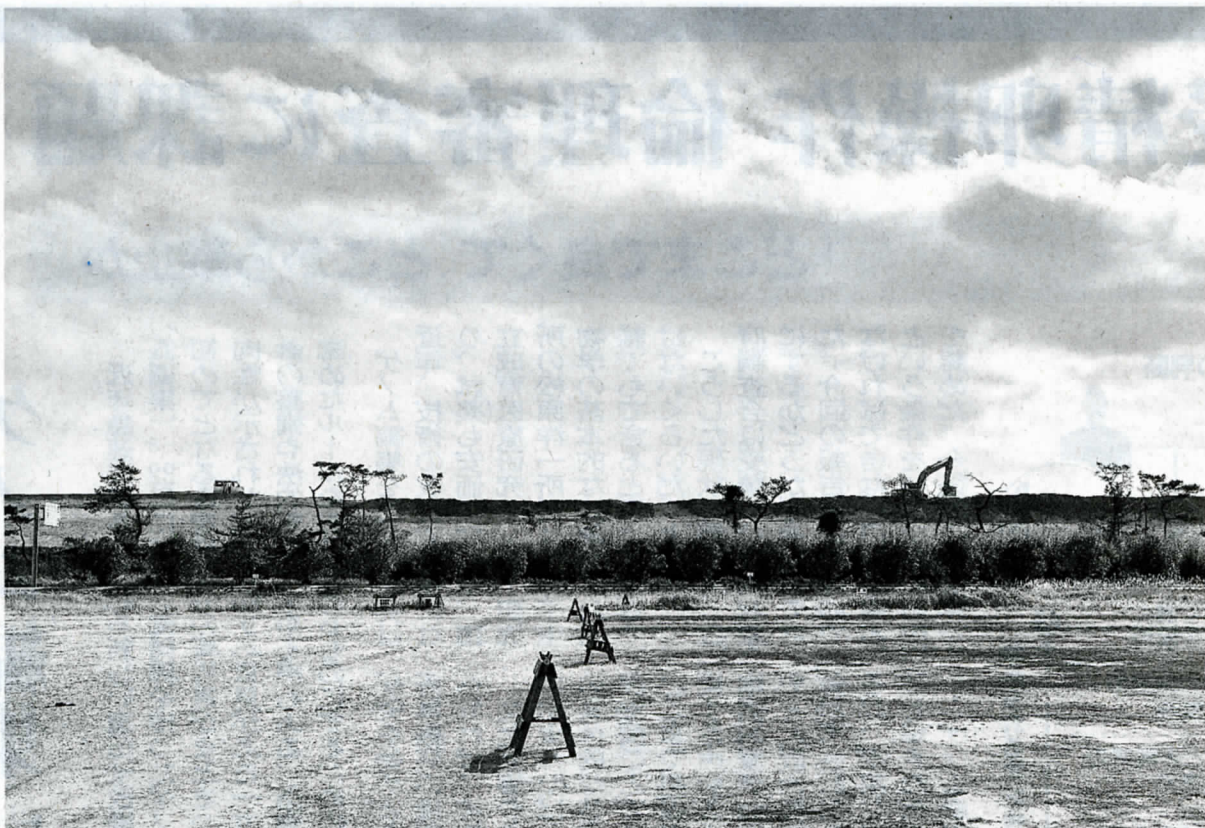
策が進む。桜前線は傷んだ列島を癒やすかのようには北上した。しかし、「火の国」熊本の地底では想定を大きく超える形で大小の地震が発生した。

「災害は忘れた頃にやってくる」と言われるが、静岡県の地震・津波対策は順調に進んでいるのだろうか。本県の地震対策が本格化するのは1976年に「東海地震説」が広がってからだ。以来40年間、被害想定と対策を繰り返し、東日本大震災を教訓に2013年、第4次被害想定が立てられた。

県交通基盤部によると、13年からの10年間で防潮堤などに4200億円を投入。巨大地震で想定される犠牲者を8割減少させることが目標だという。約500kmの本県海岸線の津波対策整備は16年3月までに約60%進んでおり、全国平均の約35%を大きく上回る。

だが、津波対策は地震対策の一部ではない。熊本地震のように、活断層による内陸型への地震対策や震災後の避難生活への対応が大きな問題であることも改めて知らされた。

東日本大震災の傷跡も癒えぬ間に熊本地震が九州を襲った。仮に人知が地震の予知を可能にしても、発生を阻止することはできない。二つの大地震から学ぶべきは「減災」への備えである。今なお、故郷や余震に揺れるわが家に帰れない被災者たちが、そう教えている。



防潮堤——特産のタマネギ畑の向こうで遠州灘を守る工事が進んでいた。浜松市西区で、全日写連の中村明弘さん撮影

(前静岡県監査委員・富永久雄)